

Book Review 15-16 時代小説 # 海を破る者

『# 海を破る者』（今村翔吾著）を読んでみた。著者は歴史小説家で著書多数。2022年『塞王の楯』で第166回直木賞受賞。

本書は元寇を扱っている。元寇とは元が鎌倉時代（執権北条時宗）に2度にわたり九州を攻めてきたこと、台風（神風）が吹いて元が逃げ帰ったことくらいしか私は知らなかった。

元寇は1274年（文永の役）と1281年（弘安の役）に2度にわたりモンゴル帝国・高麗軍により行われた対日本侵攻である（蒙古襲来）。本書は弘安の役の話である。伊予の名門・河野六郎通有の活躍を描いている（本書を読むまで聞いたこともなかった）。河野通有は、一族の内紛により、いまは見る影もなく没落（河野家は承久の変で京方に味方したことで鎌倉幕府から領地を削られた）しており、一族の惣領の地位を巡り、伯父と争うことを余儀なくされていた。しかし、通有は、内紛を収め河野家をまとめあげ、地元の市場を活用し経済的基盤を拡大していく。そんな折、元（フビライの命令）が2度目の侵攻をしてくるという知らせにそして元を迎え撃つべく九州に向かうことになる。

いざ行ってみると元軍の予定上陸地点には敵を迎え撃つべき陣地は埋め尽くされ、河野軍は各陣営の石築地の前にあえて築地を張った。これは後に「河野の後築地（うしろついで）」と呼ばれ、この不退転の意気込みは九州諸将に一目置かれた。

本書は、異国人奴隷（スラブ系女性と男性）を早々登場させて、話の進行に大きな影響を与えている。現在交戦中のウクライナ・ロシア戦争から着想されたのであろうか。また、承久の乱により没落した伊予国の豪族の河野家の次男として生まれた僧侶である一遍上人（踊りながら南無阿弥陀仏と唱える「踊り念仏」を行った。徹底的に自身の所有物を捨てたことで「捨聖」とも呼ばれた。）を重要な場面で登場させて、通有の決断を支えている。

これまで元寇を扱った小説は読んだことがなかったので非常に新鮮であった。さてタイトルになった『海を破る者』とは？